

令和2年度

第3回

地域自立のための「人づくり
・学校づくり」実践委員会

議事録

令和2年11月25日（水）

第3回 地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会 議事録

1 開催時期 令和2年11月25日(水) 午後3時15分から5時15分まで

2 開催の場所 県庁別館8階第1会議室A、B、C

3 出席者 委員長 矢野 弘典
副委員長 池上 重弘
委員 片野 恵介
委員 加藤 暁子
委員 佐々木 敏春
委員 里見 和洋
委員 白井 千晶
委員 豊田 由美
委員 藤田 智尋
委員 藤田 尚徳
委員 星野 明宏
委員 松村 友吉
委員 マリ・クリスティーヌ
委員 宮城 聡
委員 森谷 明子
委員 山浦 こずえ
委員 山本 昌邦
委員 渡邊 妙子

知事 川勝 平太

4 議 事

- (1) 第2回静岡県総合教育会議開催結果
- (2) 才徳兼備の人づくり小委員会中間報告
- (3) 未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進
- (4) その他

【開 会】

事務局： それでは、定刻となりましたので、ただ今から第3回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を開催いたします。

本日はお忙しい中、当委員会に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

私、本日司会を務めますスポーツ・文化観光部総合教育局の吉良と申します。よろしくお願いいたします。

なお、マリ・クリスティーヌ委員につきましては、所用により16時半

頃を目途にウェブで参加するというごさいますので、御報告申し上げます。

それでは、開会に当たりまして、知事より御挨拶申し上げます。

川 勝 知 事： どうも皆様、感染症の真ただ中にこの実践委員会を開けること、またこうした中にも関わらず御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

いつも私、末席に座って皆様方の御意見を拝聴するというふうにしてはいるんですけども、今日は矢野委員長の隣ということで大変緊張しております。

この間、総合教育会議というのがございまして、新しくこの教育委員に、かつてこちらにいらっしゃいました加藤百合子さん、アメリカに留学をされるということになりまして、その後、はごろもの色々な教育支援をなさっておられ、またはごろもフーズの会長でもいらっしゃいます後藤康雄さんが、最初の総合教育会議として教育委員の一人として御出席をいただきまして、今日もこちらでのやり取りを知りたいということで御出席をいただいております。昨日、私立幼稚園の協会がありまして、これが創立50周年を迎えまして、私立幼稚園というのは文科省の管轄でございまして、静岡県の私立幼稚園の振興協会というのは内外に研修に行くなど、47都道府県の中でも傑出した活動をしてこられたわけでございますが、そこにも来賓として私と議長以外では、県の担当者は来てはいたけれども、はごろもフーズの後藤会長だけでございました。

そうしたことで、これから幼児教育から生涯教育全てにわたって、教育というのは、自らを鍛えるということも含めてですけども、いかに人材をつくっていくかという、これは時代を超えた大事な課題となっていくものであります。

今、時代は大きく変わりつつありまして、ICT、これが不可欠のツールになると。こうしたことが起こる前から我々は才徳兼備というふうに言っておりました。したがって、その「才」というのが重要であることは言うまでもありません。学才の才も才の一つであります。音楽、あるいはスポーツ、演劇、様々な才能をみんな持つと、そうした中でこれからはICTのそういう技術を使える能力を持たなくてはならないということになりました。

しかし、それが何となく先行して重要視されていますけれども、実は併せて心の教育が必要だと。それと同時にまたそのツールを使って学才を鍛えねばならないという新しい仕事を先生方はなさらなくちゃいけない。ところが先生方はその任に足るだけの能力を持っていないということで、いかにして先生方の言わば才を、ICTを使う能力を高めるかという、そのためには先生だけではなくて、いろいろなこの地域のそういう方面に長けた方の御参加も必要になってくると。場合によっては学生さんの方がそういうツールの使い方においては長けている場合もありま

す。そうした意味で本当に新しい教育の仕方が今これから始まるということでございます。

もう一方、この点に関しましては、こちらでいただきました意見を、矢野委員長が総合教育会議に御出席いただきまして過不足なくお伝えいただきました。

それからまた、夢を持ってみんなが育っていけるような、これにつきましても、こちらの意見も向こうに伝えて、これから委員長ないし事務局の方から御報告があるかと存じますけれども、今日は実践委員会で作られた小委員会を預かってくださっておられました副委員長の池上先生がお越しでございますので、池上先生から小委員会の報告を聞くのを楽しみにしてまいりました。

作られてすぐにもう報告ができるぐらいまでになったということで、県を代表いたしまして、この小委員会の先生に感謝を申し上げます。

今日は、限られた時間でございますけれども、どうぞよろしくお願いを申し上げます。

事務局： それでは、議事に入りたいと存じます。

ここからの議事進行につきましては、矢野委員長にお願いいたします。

矢野委員長： 皆さん、こんにちは。

前回の会議では、Zoomを通して御出席の方が多かったんですが、今度は実際のお顔を拝見する方が増えまして、本当に良かったなと思います。Zoomを含めると全員参加でございますので、やっぱりZoomの威力というのはすごいなと実感しております。遠くにいるとなかなかここまで来るのが大変な場合もありますけれども、こうして一堂に会することができて本当に良かったと思っています。

前回も申し上げたのですが、この実践委員会と総合教育会議の関係というのは大変緊密でございますので、私どもが提案することを総合教育会議で決議して実行していただいていると、そういうふうに変な強い信頼関係があって運営されているというふうに思います。

その全体をバックアップしているのが県でございますので、実は、今日はちょっと新しい方が多いので申し上げたいと思いますけど、実践委員会というのができて5年半になるんですね。その前1年間検討委員会というのがありましたから、全部で6年半。検討委員会の時代には総合教育会議というのはなかったんですけども、この間、知事は検討委員会も実践委員会も一度も欠席することなく最初から最後まで参加されまして、しかも会議中に一言も発言をしないと、こういうことで今日まで至っているんですね。ということは、県はこの教育会議に全力を挙げていると、そういう姿勢を私は肌で感じております。

こうして皆様にお集まりいただいているのは、やはり本当の教育改革

をやるにはどうしたらいいかということでございまして、ぜひ皆様の御経験とかそれに基づく識見を御披露いただきまして、やはり総論ばかり言っているのではなくて、各論の中に答えがあると思いますので、ここが大事じゃないかという急所を皆さんにそれぞれ御披露いただきたいと思うんですね。最初は小さくても、それがだんだん大きくなっていけば全体が変わると思います。そういう会議にしたいと思っておりますので、ぜひとも県全体、あるいは教育全体を考えていろいろな御指摘を賜ればありがたいと思っております。よろしく願いいたします。

それでは、最初に第2回静岡県総合教育会議の開催結果について、私から御報告申し上げます。

10月22日に会議が開催されました。資料の1ページ、資料1とありますが、そこを御覧いただきたいと思います。

その中で、4の議事にありますとおりICTと、それから誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進、こういうテーマについて協議が行われました。

2つ目の協議事項につきましては、6ページにありますけれども、これは前の実践委員会で皆様にお示しした資料と同じです。

委員の皆様からいただいた御意見につきましては、取りまとめて総合教育会議に提出しておりますけれども、その資料が4ページから5ページ、もう一つが7ページから8ページというふうになっています。この資料に基づいて実践委員会の意見を申し上げます。

総合教育会議で出された意見につきましては、1ページの5、出席者発言要旨と書いておりますが、そこに書かれているんですが、これは詳しくは後でお読みいただくことにして、かいつまんで御報告いたしますと、まず「ICTを活用した教育の推進」ということでは、全く初めての人や、共有するものがない人同士のつながりをどのようにつくっていくかが課題という部分は大切である。

ICTとアナログのハイブリッドを進めることで生徒たちがこれまでにない成長を見せていることから、今後の公立高校の教員の頑張りに注目してほしい。

ICTをうまく利用することで地理的な距離を一気に詰めることが可能。これは、教育委員の先生がお話になった非常にそのとおりでなと思ったことでありまして、遠くにいても教えられるし、遠くからも学ぶことができる、こういう今までにない環境が生まれたということであります。

それから、ICTの活用では、子供たちの経験が少なくなったり、個人の通信環境によってネガティブな要素が出たりする。

それから、ICTを教育に活用する議論はかなり進んできており、総論から実践していく段階であると。もはや総論ではない、各論をやるべきだと、こういう意見ですね。

それから、教員養成の段階から資質を磨く教育とともに、既に教職に

就いている人に対する磨き直しの機会を作ることが大切である。幾ら道具がそろっても、それを教える側の力量というのは非常に重要であります。

実践委員会の意見は的を射たものなので、これを整理して一つずつ具体的な対策を打っていけば、静岡県のICT教育は推進する。

スポーツ、芸術、人間関係の問題等、機械では解決できない人間の触れ合いといったことに意識的に取り組むことが必要である。先ほど才徳兼備の人づくりとお話がありましたが、ツールをいかに使うか、人間としての人格をいかに高めるかと、両方から取り組んでいくことが必要だということですね。

それから、教育界から新しい組織を作って改革を始めることはすばらしい第一歩で、本県の教育のICT化を起爆剤として公の分野全体に広げるとよい。国も相当本格的な取組を始めています。大変失礼な言い方ですけど、ビジネスの世界ではICTの活用というのはものすごく進んできたわけですね。遅れていたのが官庁ではなかったか。その中で教育界がいち早く手を挙げて、その推進室を作って、静岡の場合は取り組もうということですから、そこから渦を巻き起こして全体に広めていただけたらいいんじゃないかと、こう思うわけです。

こういった意見がございました。

「誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進」について代表的な意見を申し上げますと、黙想の時間が学校教育の中に取り入れられている本県の教育は大変すばらしい。

いじめ、不登校、貧困等の問題は複雑に絡み合っており、支援する方々をつなぐ教員の負担が増えている。1人のスクールカウンセラーが抱える件数が増え、教員が相談し難くなることなどがあるため、県内全体のスクールカウンセラーの人員を増やすことが必要である。

差別的な発言や、同調圧力を子供たちに感じさせるような発言をしてしまう大人の意識改革が必要だ。

スポーツがサード・プレイスとしての逃げ場という形でのサポートができることを実感している。

現代の重要なキーワードは多様性、様々な場面で多様性を尊重する社会をつくることが大事である。

1クラスの生徒数を減らして負担を軽減するなど、教員が余裕を持てるような施策を考えていくことが必要だ。

障害のある生徒と障害のない生徒とをできるだけ交流させることが大切である。

県の特別支援教育は先進的であり、生徒と教員がマンツーマンに近く、教員が熱心に取り組んでいる。

少人数教育は教員の負担を軽減し、教育の質を高めることから、公立高校でも決められた基準に対して疑問を持つべきであり、高校に広げることも検討課題である。

画一性、それには良い面もあるが、社会や文化、教育分野では逆効果となることが多い。国や地域、そこに生活する人々の状況を踏まえて自由に組織化するべきである。

あるいは、肢体不自由な方がロボットを使ってカフェを開くなどの活動をしている事例があるので、特別支援学校の中にもICTが広まっていくとよい。

貧困等により就学を諦めざるを得ない子供たちが出てくることを危惧している。モニターする仕組みを作り備えておくことが必要であるといった意見があったわけでございます。

会議全体を通じまして、私たちと同じ方向性を共有することができたと感じております。

知事からは、会議の総括として6に記載いたしましたとおり、不登校やいじめについては、子供たち誰一人として取り残さないことが国際社会で言われており、本県はSDGsモデルになり得る。使命感と誇りを持って、誰に対しても恥ずかしくない教育の在り方を実現していく。教育委員会で実行できることは実行してもらいたいといった発言がありました。

第2回総合教育会議の報告は以上でございます。

前回の論議も踏まえ、あるいはただ今申し上げた総合教育会議の結果について、何か御意見や御質問があればどうぞ御発言をお願いしたいと思います。挙手にて御発言をお願いします。

ウェブで御参加の方は、御自身のお名前を述べて発言をしてください。

いかがでしょうか。

大体前回の委員会で議論したことと同じような内容ですので、特段のことがなくこのような状況であったということをお理解いただければそれでいいとは思いますが。

またでは後ほど振り返って、この点について御意見、御質問があればお伺いしたいと思います。

それでは、本日の意見交換は、まず才徳兼備の人づくり小委員会中間報告についてでございます。小委員会委員長の池上先生から説明をお願いいたします。

池上副委員長： 池上でございます。

この会で小委員会のことについて、きちっとその中身をお話させていただくのは初めてになります。私自身、4月にこの会議を始めてから、すさまじく生産性の高い委員会だなと正直驚いております。委員の皆さんの関わりが大変積極的で、しかも御自分の考えを様々な資料でもって提出してくださる。その資料を基に、全部で私を入れて5人のメンバーなんですけれども、あたかもボールを蹴り出して、その回ゴールを決めるまで一緒に走っていくというような、そんな感じがしています。

ある委員の方は、先生、この会は委員会というよりも何か池上ゼミに
来ているような感じですよということをおっしゃっています。というのも私が
宿題を出すんですね。

ということで、その成果の中間的な段階ではありますけれども、かな
り方向性が明確になってきましたので、これから10分ほど時間をいただ
いて、その中間報告をさせていただきます。

まず初めに、お手元資料の9ページの資料の2を御覧ください。

この小委員会、名称は「才徳兼備の人づくり小委員会」と申します。
実践委員会の提案機能を高めるため、今年度新たに実践委員会の下に設
置された委員5人の組織となっております。私が委員長ということでは
ありますけれども、ほかに2人、大学教員の方、いずれも教育学の分野の方
です。それから、民間の方としてNPOで人材育成系の活動をされている
方、それから株式会社の形でやはり人材育成の仕事をしている方とい
うことで、民間の方はお二人女性です。年代も30代から60代まで幅広い
年代、そしてジェンダーバランス、教育学の専門家の他に民間では非営
利と営利部門での人材育成に関わっている方ということ、多様な御意
見を踏まえて、また静岡県の東中西、地域バランスも踏まえて委員をお
願いしました。

さて、矢野委員長から私が取りまとめを行うようにと指示を受けまし
た。現在は「新しい時代に対応した「高等学校教育の在り方」」をテー
マに議論を進めているところであります。

一方で、この委員会では、あまり個別具体的な話には入らずに、むし
ろ全体を考えて戦略的に、今後静岡県の教育をどうすればいいかとい
うことを考えていきたいと思いますという大きな枠組みを提示して話をし
ておりました。

会議の回数ですけれども、2のところにあるように、第1回がまだ5
月でしたので、Zoomを使ってやりました。そのときに皆さんがそれ
ぞれどんな関心で教育に関わってきたのか、それからこの委員会にどん
なことを期待するとか、自分が貢献できるかという話をして、Zoom
ではありながらかなりチームとしての一体感ができたなという印象
を持っております。

その5月の後、7月、9月、11月の4回を行ってまいりました。

この間、より実態に即した議論を進めるために、7月から8月をかけ
て、実質的には事務局にお願いしましたが、県内の高校生と事業
所に対するアンケート調査を行いました。これは高校教育に対してどん
なニーズを感じているかという調査です。

また、10月の下旬には、浜松市内の高校2校の視察を行いました。公
立の学校と私立の学校であります。

本日は、これまでの内容を中間報告としてお話をいたします。

また、今後は2回の会議を経て最終報告をまとめて、改めてまた実践
委員会に報告する予定です。今後2回は、何と12月24日、クリスマスイ

ブにもやるんですね。それから1月25日に行って年度末に向けていくという段取りで考えております。

それでは、10ページの資料3をお開きください。

10ページから11ページが現時点の中間報告の文章化したものということになります。

まずIでは、「本県の高等学校教育を取り巻く状況」ということで、どういう認識をする必要があるかをまとめてあります。

急激な技術革新の進展による社会生活の変化、Society5.0なんて言われたりもしますね。それから、少子化の進行に加えて新型コロナウイルス感染症の影響、こういった大きくこれまでの前提から変わっていく、そういう時代に私たちは向かっているんだということを考える必要があるかと思えます。

こうした中で、本県においても魅力ある高等学校づくりを進めているほか、国においても高校の教育はじめ教育改革が進められているところであります。こうした国の動きも踏まえていく必要があるかと考えております。

また、高等学校に対するニーズも多様化しております。県内の高校生、それから事業所に対してニーズ調査を行って、その結果を踏まえた議論を行ってまいりました。

ニーズ調査の結果、非常に面白いことが出てまいりました。ちょっと先にニーズ調査のポイントだけ触れたいので、14ページをお開きください。

14ページは高等学校に関するニーズ調査、まず最初にどういう対象に行ったかということが書いてあります。高校生、それから事業所ということで、高校生については回収率が92.6%、非常に高いですね。学校を経由してやっています。それから、事業所については回収率33.2%ですけども、3,000枚配って995枚回答が得られたということでもあります。

一つ一つ紹介していくことは難しいのですが、高校生が身に付けたいことと、それから事業所が身に付けておいてほしいと考えることに大きなギャップが見られたりします。それをちょっと見ていきましょうか。

まず22ページをお開きください。

22ページの12番、下の表です。これは地域連携への興味と必要性ということなんですね。これを見ていきますと、高校と地域や企業等が関わる機会への興味と必要性について、上の方の高校生の興味は「よくある・思う」が14%、「まあまあある」が46%、合計で60%。対して企業の方がどう考えるか。そういう関わる必要というのが約50%「よくある・思う」、45%がまあまああるということで、何と90%以上が高校生と地域との関わりが必要だという認識をしています。

それから、もう一つは19ページを、少し戻っていただければと思います。

19ページは、高校生が身に付けたいと思うことと、事業所側が身に付

けておいてほしいと思うことのギャップです。

2つのグラフがあって、薄いのと少し濃いのがありますが、例えば「進学に役立つ学力」というのは、高校生は53%が身に付けたい。一方で事業所からは実に3%、ごく低いですね。「就職に役立つ技術や資格」、高校生が約3割に対して事業所は1割です。1つ飛んで下、「自ら考え行動できる資質や能力」というところ、高校生はこれが約16%ですが、事業所は50%がこの能力、資質を求めている、自ら考え行動できる力を企業は求めていると。それから「多くの友達と知り合い良好な関係をつくる」については、高校生は14%、企業は25%、よってこれも高校生の認識のほぼ倍です。もう一つ「他人を思いやる心など豊かな人間性」、私たちの会議で言うところの才徳兼備の「徳」のところですが、これは高校生が8%に対して企業は28%と非常に高い。

こうすることで、高校生が高校で求めたいことと、事業所が高校生に身に付けてほしいこととの間に少しギャップがあるという認識も大事ななと思いました。

いずれは静岡県で暮らしたいと思っているという人が一体どのぐらいいるのか、大変興味のある数字ですが、26ページを御覧ください。

26ページを見ると、16番のところ、地元への貢献意欲ということですが、これも、「静岡県で暮らしたい」、真ん中のところ、これが60%ということでもあります。60%を多いと考えるのか少ないと考えるのか、これは議論が分かれるかなと思いますけれども、これだけ恵まれた静岡県にとどまりたい、あるいは将来帰ってきたいという人が6割しかいないのは非常にもったいないという認識を改めてしているところでもあります。

他にも大変興味深いデータがありますが、それはまた後で御覧いただければと思います。

ではまた10ページに戻っていただけますでしょうか。

こうした状況を踏まえて、Ⅱでは、本県の高等学校教育における課題について、「高等学校に求められる役割」「地域を見据えた人材育成の必要性」「教員を含めた運営体制改善の必要性」「地域の実情に応じた魅力ある学校づくり」という項目で整理をしております。

高校生の社会や自分に対する意識を高めるとともに、実社会で様々な課題に挑んでいく力を育てていく必要があると考えています。そのためには、やはり学校の中で提供できる学びだけでは不十分だというのが私たち委員の共通の認識です。子供の学びを学校外からも支えていく仕組み、またそういう運営体制を作っていく必要があると、地域の実情に応じた多角的な検討が必要になると考えております。

この地域の実情というのが実は大事で、全く同じ枠組みによればどの地域でも機能するかというところではないと思います。それは学校の位置する地域、そこにどういったリソース、資源があって、それをどんなふう結びつけると子供たちの学びに有益なのか、そういった地域性も十分に意識していく必要があるというのが一つのポイントだと思います。

次に、Ⅲを御覧ください。

高校を取り巻く状況、課題を踏まえて、高等学校教育に求める姿について整理しました。

静岡県では、「美しい“ふじのくに”」の未来を担う「有徳の人」づくりを進めています。高校教育に求める姿を「次代の担い手の育成」というふうにしました。具体的には、多様な学びの場を提供する中で、自ら考え挑戦する力を育てていくと。先ほど御覧いただいた表でいうと、事業所側がとても強く求めているものですね。

いずれは静岡県で暮らしたいというのが約6割ですけれども、様々な形で静岡県へ貢献する多様な人材を育成していく必要があるというふうに考えています。その実現には、「地域社会に開かれた教育」、静岡県という「学びのフィールドを生かす教育」が求められていると考えています。非常に豊かな地域、その地域の豊かさを高校生にもダイレクトに知ってもらいたい、それが私たちが共通に考えていることです。

それでは、次に11ページを御覧ください。

Ⅳになります。「静岡型高等学校教育の実現に向けて取り組むべき施策」といたしまして、求める姿を実現する上で必要となる施策、具体的な取組、これまでの小委員会での議論等を踏まえて整理してみました。

まず1のところでは、基本的な施策の方向性をこんなふうにまとめています。「地域の実情を踏まえた特色ある教育の実施」、「地域との連携強化に向けた学校の運営体制の改善」ということです。

基本的な方向性としては、学校外の様々な教育資源も活用した学びの提供、地域の実情を踏まえた先駆的な取組の実施、地域と連携した学校づくり、外部の多様な人財が関わる仕組みや地域連携活動を行う生徒が評価されるような仕組みの導入といった意見が出されております。

2のところでは「基本的な施策を進める上で必要となる具体的な取組」というふうになっていますが、小委員会ではより具体的な提案のあった「地域資源や情報のプラットフォーム構築」、「コーディネート専門人材の配置・育成」、「学校と地域の連携・協働を進める教員の育成」の3点を上げております。

特にこの辺りは実際に人材育成をNPO、あるいは企業で行っている委員からかなり具体的な提案もいただいております。

取組としては、多様な主体が学校現場に関わる仕組み、あるいは教育現場と外部人財が交流して学び合えるプラットフォームとともに、それをコーディネートする人材を配置して機能させていく仕組みを構築していくといったことが提案されています。コーディネートする人材をやはり地域から発掘して育てていく枠組みも小委員会では視野に入れて検討しています。

また、何と言っても学校の中で先生方自身の意識改革、あるいは先生方が地域と連携した取組に関わっていくための時間をどう作っていくか、こういったことも大事で、研修等の実施、あるいはICTを活用し

た教員の業務改善といったことも提案がされております。

次の3のところ、「取組を確実に進めるための方策」となっています。そのためには、課題を短期、中期、長期に分けて段階的に着実に実施していくことが必要だという認識があります。

短期的な取組としては、モデル校による実施を含めて可能なものから実施に移していくと。中長期的な課題については、これは中長期的だよねといって終わりじゃなくて、どこのテーブルがそれを検討するのかということをしちっと明確にして、そのテーブルにしっかりと伝えていくと。バックキャストという言葉がありますけれども、あるべき姿をまず明確に出して、そこから逆算して、では今の段階でこういうことが必要だねというように具体的に目標を立てていく。そうやって可能なところから実施していくべきだということを指摘しておきました。

今後、12月、1月の2回の小委員会がまだあります。そこで議論を深めて、特にⅣのところについて、より具体的に整理をして、2月16日に予定されています実践委員会に最終的な報告をしたいというふうに考えております。

最後に学校視察の結果について簡単に御報告いたします。

12ページの資料4を御覧ください。

浜松湖北高等学校と浜松学芸高等学校、2校に行ってまいりました。

湖北高校は、旧気賀高校、引佐高校、三ヶ日高校を統合した学校です。普通科、農業科、工業科、商業科というふうに普通科以外にも3つ学科があります。この4学科の連携の下で「湖北MAGIC株式会社」という模擬会社を設置して、生徒が主体となって企画、運営、広報を行っております。

フルーツパークを1日借り切って行うような非常に斬新で意欲的な取組もありました。また、商業科では地元企業と連携した授業が行われておりました。非常に興味深かったのは、その地元企業の方がこの高校の出身の方であり、やはり母校、地域に対する愛を感じた次第であります。

また、私たちはそこで企業の方のお話を伺ったほか、実際の商業科の授業にも少し顔を出して生徒との意見交換もしました。学科間連携、地元企業との連携によって、生徒はとても地域に貢献したいという思いを持っていることが分かりました。

13ページを御覧ください。

次は私立の方です。浜松学芸高校ですけれども、ここはカリキュラムの中に探究活動を取り入れております。地域の人とグループ活動を行う「プロジェクト学習」など非常に意欲的な課題解決学習を行っております。

その中心となっている先生の話をお伺ったり、また授業の見学、生徒との意見交換を行いました。生徒からは、教科の学習が探究活動に生かされ、教科と探究活動の深い関わりを感じるという声があり、地域での

学びが教科の学びの動機付けになっていることが分かりました。

ここが実は非常に重要なポイントで、地域の学びをすると教科の学習がおろそかになるのではないか、そんなことをやっている暇があれば国語や数学や英語を学ぶ方が大事なんじゃないかという声に対して、いや違うと、地域での学びによって教科学習の強い動機付けが得られるんだという、二者択一ではなく相互補完的な、あるいは相互強化的な関係にあるということを改めて感じた次第です。

今回の視察で、「地域連携」あるいは「探究活動」の重要性を改めて認識いたしました。2つのいずれにおいても、生徒が教員の指導の下で自主的に取り組んでいるほか、地元企業なども熱心に関わってくださっており、とてもすばらしい今後の参考となる事例だったと感じました。

少し長くなりましたが、私からは以上です。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

本当に精力的な委員会の活動、本当に幅広い視点、そしてその方向付けについて本当にすばらしい御報告をいただいてありがとうございました。

それでは、これは中間報告ということでございまして、年度末に最終報告をいただくことになっておりますが、それぞれ皆さん、今の御説明について御意見をいただきたいと思っております。

なかなか手が挙がりませんので、私は人をお願いするのが得意なので、申し訳ありませんけど、まず実際に高校教育に携わっておられる星野委員、いかがでしょうか。

星野委員： いろいろ御報告ありがとうございました。

ちょっとICTとも絡めてなんですけど、本校、そういう意味でオンラインを3月2日に日本で一番最初に始めていろんなことを試しております。

今、非常に一番感じているのが、今もお話ありましたが産学協働とか高大接続、あと国際交流、これは今もう既に同時並行でやっております。国際交流は皆さんもイメージつくと思うんですが、普通に海外の交流校と週1回英語の授業を使ってディベートなるものを行っています。

産学協働に関しましては、培養肉をやっているインテグリカルチャーという非常にそのジャンルでは著名なベンチャー企業とタイアップをして、そこでオンラインを使って事前学習をやって、最終的にはプレゼンもすると。あと今クックパッドさんもやっております。そういうこともいつでも可能だなというところを感じています。

高大接続でいいますと、京都大学の塩瀬教授という方がいるんですが、そこの研究室と、学園祭がなくなったときにオンラインで肝試しをやるとういうことで、その研究室の大学生と本校の有志が、実行委員が集まって実際にオンラインで学園祭と肝試しをやって、いわゆる若者の

言葉で言うと、ユーチューブ上で非常にバズったと。しかも京都大学さんの研究室ではそれを論文にして学会発表もしているというようなことも、いろんなことが今やれているという状況がございます。

あと、本当に御意見もありましたとおり、生徒の方がやはり非常にうまく知識とかスキルがどんどんアップしておりますので、そういった意味で自主性、主体性を育む、才徳兼備のそういう人材を輩出するという意味では、早くそのハード面のところを整備して、早く走り始めるというところをやっていただきたいなというふうに強く思っております。

あと、学年の垣根が完全に超えます。過去にアメリカの心理学者のガーリン博士というのが、とにかくずっと前から創造力、クリエイティビティを学ぶ機会というのがなさ過ぎると、どこも、世界中の教育もと。アジア各国、ヨーロッパもそういうことをやっていますが、日本はとてつもなく遅れているというところを感じておりますが、そういったクリエイティビティのところもどんどんICTを使うことで、また生徒たちが勝手にどんどんいろいろやり出しますので、そういう機会をぜひ作っていただけたらなというふうに思っております。

すみません、私からは以上になります。

矢野委員長： 加藤暁子さん、いかがですか。高校生のリーダー教育に長く携わっておられますので。

加藤委員： ありがとうございます。加藤暁子です。

リーダー育成するというところで17年間、今年はオンラインでやりましたけれども、この17年間変化を見てきて、最初の頃に比べて今の高校生たちは、もう自分から勝手にというか地域と結びついて、何か地域と一緒にまちおこしなりいろんなことをやっていこうというエネルギーと、それから企画力がすごいんですね。それとICTを駆使して、そういう外に対して発信する能力というのはすごく生まれていると思うんです。

ただ、一番の問題点は、その中で格差というか、そういうことに本当に意欲的な子はどんどんやるんですけれども、そうじゃない子はちょっと置き去りにされてしまうというところがあるので、いかにして置き去りにされているところをやる気にさせるかというのは大事な事かなという事は思います。

それから、やはり国際的というか、ここに国際ということで高校生からも重要だというのが本文ちょっと上ぐらいにあったと思いますけれども、まだまだその部分が格差があるかなと。

今年のリーダー塾はオンラインでやったものですから、逆にオンラインを逆手に取って、オンラインでしかできないことをやってみようかなと思って、アジア20か国の高校生たちとつないでやってみたんですけれども、そういうことをやってみると、英語ができないというか、英語を

ツールとしてディスカッションして、さらにさっきのこういう色々な新しい取組を英語で発言して海外の子たちと連携して、いろんな国といろんなことを若者でやっていこうということに目覚めるわけなんですけど、そこぐらいまでぜひとも静岡県でも目指していただけたらいいんじゃないかなということ。

昨日、ようやく留学生たちが200人ほど来日したんですけど、高校生たちが、今、2週間待機ということで成田空港のホテルにいるんですけども、その子たちに、住友商事の方にいかに農業を新しい近代化させるかというようなことで、そういう話をしてもらったら、やはりインドとかパキスタンとかバングラデシュとかフィリピンの高校生たちは、ものすごい農業ということに対する意識が高かったんですね。やはり中々農業というのは、とても収入を得るという意味ではまだまだ全然発展途上国では中々大変で、農家のお父さんやお母さんは自分の息子や娘を農業の従事者にさせたくないというのがあって、ところがそれを、例えば住友商事なんかはいろんな新しい取組をICTとか取り入れられてやっているの、そういうことに対してものすごい質問が昨日出たんですね。

ですから、これを見るとやはり農業というところが非常にちょっと低いなと思ったので、静岡県は農業の県でもありますから、そののところがいかにこういう社会と結び付けてできるのかということがもうちょっと新しい取組ができるといいかなということを読んでも感じました。

最後に、やはりとても興味を今日持ったのは、池上先生がおっしゃったいわゆる事業所と高校生と考えているところがちょっと違うということなんですけども、やはり自ら考えて自分で何かやるということについて、企業側はすごく求めているということが分かりましたけれども、学校にいると高校生たちは、よく私も言われるんですけど、これやっていいですかと聞かれるんですね。私はやりたいのと聞くんです。それで、やりたければ私を説得するような面白い案を持ってきてよと言うんですけど、何かそういう教育というか、自ら考えてどう組み立てていくのかということ、高校じゃなくて多分これは小学校からやらないと身に付かないかなと思うので、そういう小さいときからの教育というののも必要ではないかなということ、今回これを読んで思いました。

ありがとうございました。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

いわゆる地域や産業との関係で、学校をどう見ておられるか、認識のギャップというお話もありましたけど、産業界におられる藤田さん、口火を切っていただけますか。

藤田（尚）委員： ありがとうございます。

高校生、学生さんの皆さん全般的に、大学生にも言えることだと思う

んですけど、中学卒業して高校に入ると、本当に高校卒業して社会に出る人たちも増えてくると思うので、いかに高校時代に社会活動を経験できるかということが私は大事なのかなというふうに思っております。

高校を出て、その後大学に行って、もちろん教育者の立場になる人もいれば、そのまま社会を経験しないで、また自分が教える立場になっていくと、なかなか社会がどういうふうに動いているか分からないまま社会に出てしまうということもあり得るというふうに思います。

毎回、この会議でお話をさせていただく部分で、やはり企業での経験とか社会での経験とかというものが高校時代の中で、アルバイトだけではなくて、それが単位化するとか、カリキュラムの中に入るとか、そういうことも含めて経験をしてもらえると、また何か見え方が変わってくると思いますので、そこに重点を置いていただける項目が少しまた入ってくるとありがたいのかなと思っております。

矢野委員長： ありがとうございました。
 それでは、松村さん、いかがでしょうか。

松村委員： 池上先生がおっしゃられた19ページのギャップについて、事業者側の求めるところは大変納得しました。採用するときには必ずこれは考えているんですけど、事業者は本当に勝手なものでございまして、こんな人材が早急にいるわけがないと。高校生にこれを求めているんですけど、今藤田さんもおっしゃったように大学生でも求めるし、恐らく中途採用でも求めるし、こんなに立派な人間がそうたくさんいるわけではないと思いつながら聞いていましたが、最終的にはこういう人材を求めているということは確かです。

先ほどの池上先生の御報告の中でも、国の教育改革を含めて、あるいは県が今やろうとしていることが、ただ受け身の教育でなくて、自ら考える、行動できる子供たちをつくらうとしているんだと思うんですね。ですからむしろその先に結果としてそういう子供たちがこれから生まれてくるんじゃないかなと、あるいはそういう子供たちを我々がつくっていかねばいけないということだろうと思うんですね。

企業の中では、既に採用した社員たちを再教育とか研修とかをやりません。そういう中でできたらこういうことを身に付けてほしいということで常に社員教育はしていると思います。

ですから、最終的な人間づくりの方向性としてはこれでいいんだろうと思いますけれども、採用の時点でこれですぐにこの基準にぴったりと合う子供たちがいるとは私は急には思いませんけれども、このギャップが出ているということ自体は面白いなと思います。

先ほどの池上先生の間接報告について、本当にまとまった報告をいただきました。先ほど申し上げたように、この5番の国の教育改革というのが、本気で文科省がこれをやろうとしているなら、今まで文科省は本

当にいいことをやっていたのか分かりませんが、これは正しい方向だろうと思いますし、これに向けて県もその流れでやっていらっしゃるんだと思うんですけれど、授業のやり方とか先生方の教育の仕方が相当変わってくるんだろうなと思うんですよね。その辺りが県としても国の流れに沿ってやるべきことかなというように感じた次第です。

矢野委員長： ありがとうございます。
 それでは、佐々木さん、いかがでしょうか。

佐々木委員： 先ほどの池上先生のお話で興味深く伺いましたけれども、今の19ページのギャップはそうなんだろうなと思って見えていますけれども、やはりどの企業も本当にコストダウンを多く求められる中で人材が減ってきて、即戦力化ということをしごく求めた挙げ句がこういうことになっているんじゃないかというふうに思うんですね。結局、新人にすごい高度なレベルを求めるわけですが、では我々が入ったときに、もっと優しくゆとりを持って育ててもらって、いろんな遠回りをした結果、いろんなことが分かって、その経験値で今自分がここにいるという気がするんですが、これは無理を教えているわけで、無駄を排除しているような教育の中身がここに来ているような気がしているんですね。

今ここで、先ほど先生がおっしゃった地域の学びが教科の学びの動機付けになるというのは、まさしくそういうふうだろうと思いつながら我々も地域に関わるようにしているわけですが、なかなか先生側、学校側にもそういうゆとりがないというのが実情で、いろんな教育プログラムを持って学校に我々もお話を差し上げるんですけれども、それを受けてくださる先生というのは同じ先生なんです。これは私も中部電力の中で教育財団の理事長を4年間ぐらいやっていたけれども、全国の中で毎年200学校ぐらい教育助成をしてきたんですが、先生が変わるとその学校が出てくるということで、学校についているわけじゃなくて先生についているというのが大体こういう世界の縮図だろうなというふうに思うんですね。

生徒のポテンシャルを信じて、何かのきっかけを与えればきっと何かをつかむ。先ほどの答申の中にもありましたけれども、サード・プレイスという場が必要で、そのサード・プレイスはいろんなコミュニティーにいっぱいあるはずなんです。そういうサード・プレイスをきちっと地域の中に作って、企業もそういうところに参画していこうという思いは強く持っているので、そこをうまく融合していけば、先ほどおっしゃったいろんな思いの格差、要は前へ進もうとする子はどんどん行くんだけど、気後れしている子はなかなか前へ出ないその格差をいろんなところで解消できるんじゃないかなという気はしてこれを聞いておりました。ちょっとざっとで申し訳ありません。

それと、地域のリソースを使って学校を魅力的にしていくという話が

ありました。そういうことができると思うんですが、今の実情を見てみると、高校生も大学生もそうですが、魅力あるまちにある学校に行こうとしているんじゃないかという気がします。ですので、まちづくりが非常に大事で、そのまちづくりをしっかりとそこにある学校も光ってくる、そこにある企業も光ってくるというか、どっちが鶏か卵か分かりませんが、そういうことが意外に両輪で必要なんじゃないかなという気がします。

以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。
そのまちづくりに高等学校がどういう役割を果たしているかということに興味ありますね。
里見さん、ビジネスとスポーツ界と両方関係しておりますので、何か色々感じられたことがあればお話してください。

里見委員： 報告を拝聴して、キーワードは「地域との関わり」と、「学校の経営の在り方」がどう変わっていくのか、変えていくのか、という点かなと感じました。

ちょっとお聞きしたいと思いますが、例えば高等学校の校長先生が新しい学校に赴任したときに、当該学校の運営方針に関するレポート制度みたいなものは存在するのでしょうか。

というのは、地域との関わりを考えていくときに、校長先生も一般企業の地域責任者も同じ転勤族だと思います。

私が以前お世話になりました銀行では、県内に150内外の支店があり、支店長の任期はだいたい2から3年です。そうした中で、地域によって大きく違う特性をいち早く理解し、その地域にあった営業戦略を打ち出させていくために、「支店長着任3か月レポート」というものを頭取宛に書かせていました。中身は、産業構造やマーケット分析、地域資源、人材、店舗特性などを総合的に検証するわけです。それをベースに、攻めと守りの両方から店舗運営方針を策定して、いわば支店長の地域へのコミットメント的な位置付けとしていたわけです。

着任早々の大変な時期、支店長にとっては苦しい面もありますが、このレポートによりいち早く地域特性が分かり営業戦略が立案できる仕組みとなっています。

学校制度の中で、そのような仕組みが既にあれば、その中身をより地域との関わりと学校運営方針に軸足を置いた内容に修正すればよいと思います。地域連携強化策、学校運営体制の在り方、その時の人材育成などを具体的に考察してもらい仕組みが考えられると思います。

また、そのような仕組みそのものがなければ新設し、地域連携策を前面に打ち出していくことで、地域をいち早く俯瞰的に見て体感する実践面での効果が期待できると思います。

校長先生の地域経済への関心と理解が深まれば、当然先生方にも影響が幅広に及ぶでしょうし、生徒たちの「体験の場」を提供する周囲の理解も深まっていくことに繋がると思ったしだいです。

池上副委員長： 池上です。

大変興味深い御指摘をありがとうございました。

先ほどの校長先生がどうなのかという方は教育委員会にお答えいただくことにしたいと思えますけれども、今回視察した2校のうち公立学校の方、実は校長先生は地元出身の方なんです。私実は、以前からその方を知っていたんです。地元出身で地域特性を非常によく分かっているなということを感じました。

それから、私立の浜松学芸高校の方は、やはり先生方が色々異動するとこれだけ継続して築き上げるのは大変ですよという話をしたら、僕らは転勤ないですからという言い方をされたんですね。非常に興味深い。つまり同じチームでずっと同じところを目指してやっていけるという、それを逆手に取ってというか資産としてやっているなという感じがありました。

小委員会で検討している中で、当然先生方の任期、とりわけ校長の任期は短いということも話になりましたし、こういう活動が非常に属人的に展開するというのも、先ほどの佐々木委員のお話にもあったとおり問題だと。したがってそれをどうやって仕組み化していくかというところを私たちとしては考えたくて、今日はあまり詳しく触れていませんけれども、高校の先生方の広い意味でいうと人事の在り方についても踏み込んだ議論を今展開しつつあるところです。

ありがとうございます。

矢野委員長： ありがとうございます。

宮城さん、演劇活動を通じて何かいろいろお感じになっていることがあると思うんですね。

大変恐縮ですが、宮城さんの後は渡邊先生、美術館経営をしていらっしゃって、またそういう関係でもお話いただけるとありがたいと思います。

宮城委員： 先ほどから話題になっている自分で主体的に考える、人のまねじゃないクリエイティブなことを考えていくこと、つまり人とは違うことを考えること。それはこれからの日本ではおそらくそれが一番大事になってゆくと思うんですけれども、SPACでは中・高生を毎年1万人以上劇場に呼んで、彼らを見ていると、ともかく周囲から浮かないように浮かないようにしているわけですね、彼らは。

例えば中・高生だけ集めたダンスカンパニーをSPACが作って、そこで活動してもらおうとみんなものすごくバラエティーに富んでいるんで

す。なのにそのダンスカンパニーの子が属している学校が全員一遍に劇場に来ると、その子も見つからないぐらい埋もれているんですね。本来の姿を消しているというか、ほとんどカメレオンのようにみんなと同じ色になっている。

どうしてこういうことが起こるんだろう。僕が思うに、静岡の高校生ぐらいの子は「失敗してはいけない」というのがものすごく大きな岩のような、頭に乗ったたくあん石みたいになっていて、失敗してはいけない、失敗したら終わりだみたいな。どうしてそうなっちゃうんだろうと考えてみると、多分高校生の周りに失敗した大人がいないからじゃないか。失敗しても何とかなるんだという実例が一人もおらず、みんなまとも。本当に立派な人しかいないとか、まともな人しか見当たらない。僕は30%の子が静岡に帰ってこないのはそれが大きな理由だと思います。静岡にはまともな人しかいない。自分は浮いてしまうと感じる。

結局多様性ということになるんですね、最終的には。つまりそんなに多様性があるように見えないということです。高校生から見て自分の周りの人々に多様性があるように見えない。僕としてはこういう大人もいるんだよ、こういう生き方もあるんだよということを、中・高生のうちにいろんな形で見てもらえればいいなとつくづく思っているということです。

矢野委員長： ありがとうございました。
 とても新鮮な視点での御指摘でありがとうございます。
 それでは、渡邊さん、いかがでございませうか。

渡邊委員： 私は50年ぐらい美術館の経営をしております、その中で近年、一つ大きな流れが変わってきた感じがいたします。

美術館の展示は物を展示して、その横にこれは何であるかと説明を書きます。昭和の時代は、皆さんが見に来ると、まず説明を読んでからものを見る。大学の博物館学教育でも、先にものを見るような形ができるようにならないかとよく学芸員でいろいろ検討しました。東京のある美術館では説明を別に書いて、ものの説明を何にも出さないようなテストを試みたりというところもありました。けれども、最近は説明文よりも物を見るような形になってきたんですね。それは物を見ることによって、自分の感性を働かして、自分の判断をしたいという意識が最近少し芽生えてきたと思います。物を見てから説明を見て、それと合わないとすぐ質問をしてきたり、私たちは時々戸惑うんですけども、物を見た感覚と説明文と一致できないとの質問とか意見が多いんですね。

ですから、書いてあるとおりをそのまま覚えて記憶するのではなくて、自分で見たものを感じたものを自分で言葉に出そうという、これは特に最近の男性よりも女性が多いんです。それで展覧会でも江戸時代や明治ぐらいの非常に有名な画家を展示しても、有名な画家だけではもう

人が来ないんですね。自分が躍動する、そういうものに人は集まってきている。だから漫画とか日本の、漫画チックみたいな新しい形、ヒグチユウコのように空想と現実を行き交う自由な発想とタッチの作品に感動する。だから既成概念でものを見るという伝統が少し変わってきているという感じがします。

それから、以前は1人で来ないで、大体女性は数人で来ていたんですね。それでおしゃべりする。最近では1人で来るのが多いんですね。グループで来るというのは極めて少なくなってきている。やはり少し変わってきたという感じがいたします。

ここで、今後、私たち担当者としてはどのようにそういうものの見方をもう少し発展させるか、個々の感性の育成にどうやるかということの色々考えていく必要があると思っています。

以上でございます。

矢野委員長： ありがとうございます。

山本さん、サッカーで若者を鍛えておられますが、その中で地域と学校との関係ということについて御意見いただけますか。

山本委員： 幾つか提案もあるんですけど、佐々木さんの先ほどのお話にすごい共感を実はしていて、好きなこととか得意なこととかに人生のチャンスがあると思うんですね。勉強はすごいできることはベースとしては大事ですけれども、人生いい仕事をするのが重要だと思うので、僕はそこでいうと部活というのはすごいチャンスがあると思います。好きなことにチャレンジしていると思うんですね。僕らだったらサッカーをやっているし。

部活というところにそういうチャンスがある。そこは指導者をやはり生かさないと公立の場合難しいですよ。だから例えば学校のカリキュラムが17コマあって、あまりやりたくない教科を一生懸命頑張っている先生がいて、その先生は5時前からもう帰りの支度してさっさと帰りたい。一方で、俺は放課後の高校サッカーの指導に情熱を捧げたいと思って、それは好きだからそれに行くんですね。だからその好きなことをどう生かすかと考えると、教員の数を増やすのは大変なことだと思うんですけど、週の5コマはあなたは部活ねと。その分、12コマにして、部活をやりたくなくて早く帰りたい人は17コマ、一生懸命授業をやって子供たちに得意な授業で教える。残りの部活も授業として捉えて指導ができるような仕組みにすれば、これは静岡モデルとして、これから子供たちは減りますからね。教員の数を増やすためにも、そういう分厚いサポートができる。

静岡県に6割帰りたいというのはいいことだと思いますよ、僕は。ほとんどが東京に残りたいか、大阪に帰るか、野球のチームだったら12チームしかないですからね。そういうところにしか行きたがらないわけ

で、6割を8割にできたらすごいと思いますけど。

あともう一つ、中田英寿というのが僕の教え子でいるんですけど、彼は勉強はとてつもなくできました。蕪崎高校でトップ10にいつも入っているような子だったので。彼は大学に行っていないです。15の頃から代表の合宿に来て、イタリア語の本を読んでいた。何でおまえイタリア語の本を読んでいるの、俺はセリエでやりますからと。当時、セリエ、イタリアが世界のトップだったんで。そこから5年後にイタリアに行きまして、もちろんオリンピックも出ました。U20、20歳以下で世界のベスト8になりました。ずっと一緒にやってきましたけど、そうやって世界へ出ていったんですね。大学に行く必要はないから勉強は途中でフェードアウトして行って、イタリア語に傾注していったと思いますけどね。頭はとても賢いですよ。そういうのはいっぱいいます、サッカー界でも。ガンバの監督をやっている宮本も教え子ですけど、彼も頭は相当いいですからね、語学堪能ですし。本田圭佑だって、5か国語ぐらいペラペラしゃべれますからね。それはいい選手で、みんなとコミュニケーションするために語学が必要だと思うから、一生懸命語学は身に付けて、みんなしゃべれる選手が今海外に行っている選手たちです。日本代表も今、全てが海外組でああいう国際試合ができるようになってしまいました。そんなチームを静岡で作りたいなというふうに思っています。

今回、リモート社会で、僕はリモートは効率もいいし、便利だし、非常に重要なものだとは思っています。でも全く足りません、リモートだけでは。だって、警察の人も、消防の人も、医療関係の人も、全部現場に行かなきゃ成り立たないということを思い知らされて、そのコミュニケーション能力のない人は心がどんどん折れて行って大変なことになっていますね。

そういう心をどう鍛えていくかということもすごく重要な方向性だと思うんで、その辺の意欲とか情熱をどのように育て上げられるかというのがポイントなのかなというふうには思っています。失敗の量の多い人が成功の量も多くなると思うんですね。失敗を恐れて何もチャレンジしないことが人生失敗させてしまうんで、たくさん寄り添って子供たちにチャレンジさせる、挑戦させ続けるということが大事だと思います。成功より成長を求め続ける子供たちを育てる。努力した証しが成長という日本語だと思うんで、努力する習慣を身に付けさせるのが学校のやるべき仕事なんだろうかなというふうには思っています。

報告、すばらしい報告過ぎて、我々全然気付かないようなことがたくさんあって刺激にはなりました。

以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。
他にございますか。

山 浦 委 員： よろしいですか。恐れ入ります。NPOをやっています山浦と申します。

私、学校と地域をつなぐコミュニティ・スクール・ディレクターというコーディネーターをしております、あとはひきこもりの若者ですとか、困窮してしまった方の就労支援もしているんですけども、学校と地域をつなぐということをやっている5年ほどやっております、先ほどのいろんな大人に出会ってほしいということなんかを今までたくさんやってきました。

地域の魅力ある大人との出会いがあれば、子供たちも変わっていくんだなということをやった経験が豊富で、先ほど、静岡県はとても失敗しない人が多いから失敗してはいけないというふうになってしまうというお話もあったんですけども、地域で、学校教育目標に合わせて志を育むための授業というのを作っております、志がなかったらこの世にない、社長ですとか代表という方だけをお呼びするような授業も、30人ほどお呼びして生徒たちと対話をするという授業もやらせていただいたんですが、社長のたくさんのチャレンジをして失敗して、いろんなことがあって紆余曲折あって、試行錯誤があって今があるというようなお話をしてくださると、子供たちはそこからたくさん学びますので、泥くさい人間らしい大人との出会い、魅力ある大人との出会いによって子供たちは変わっていくなということをととても思います。

知らないものには憧れることができないので、やはり知るということが大事かなというふうに思っております、生徒たちは消費者目線でしかないんですよ。先生から教わるとか、何かを買うとか手にするとかという、受動的になってしまっていて、先ほどどなたかが、やってもいいですかと聞くというふうにおっしゃっていましたが、消費者目線になってしまっていて、貢献する人材を育てたいと言われても、貢献している人を近くで見たりとか感じたりとか、お話を聞くという機会はないですし、自分たちがやっていることが貢献しているということに気付く、声かけをしないと気付かないということもあります。

したがって、私が今いる学校では学校の教育目標に合わせて、1年生で志を知る、地域の人からたくさん話を聞いていろんな方の志を知り、2年生で自分たちが自分の志を立てて、3年生で地域に貢献する活動、地域貢献活動というのをあえて地域の方たちと組んで志を実現するというのをやらせていただいておりますけれども、それによって生徒たちが自分の志という芯をつくることができ、高校に入ったときに自分が活躍するというよりもマネジャーになるといった子供たちがとても増えた事例がありました。やはり自分たちが地域の方と関わって、何がどう変わるかというところがすごい重要なことというふうに思っています。

あとは授業の中での地域資源を教育資源にするということ言えば、例えば数学の三平方の定理の時間に測量の方に来ていただいたりですとか、屋根の傾斜が、これは合っているかどうか分からないんですけど、

サイン・コサインとかとつながっているというようなことを生徒たちに教えてくださるような地域の企業の方というのにも開拓しながらやっています。

ICTでいいますと、Zoomを使って先日やったんですが、スマホを、自分を映すのではなくて仕事をしている方の仕事人の目線を写して、ネイルのアーティストの方の仕事を見るですとか、金属加工を見るですとかということをやってみました。ネイルなんかは、磁石によって模様をつくるというようなことを知ることができまして、それって理科とつながっているねという話ができたりですとか、パン屋さんのパンを焼く窯と金属の塗装の窯の温度が違うということから、また理科につながっているねという話ができたりしまして、そういう実際のリアルな社会と今の学びがどうつながっているかという興味を持たせることによって、モチベーションというか、さっきその時間を数学とか国語をやった方がいいんじゃないかというお話がありましたけれども、そうではなくて、いろんなことを経験することによって生徒たちはじゃあ私はもっとこういうことを学びたいとか、学ばなければとかというふうに変わっていくんだなということを感じています。

学生と企業のギャップというの、学生もそうです。就労支援していても技術とか資格というところに走りがちなんですけれども、どこに行っても通用する力という土台を付けることの方が大事なんじゃないかなということは本当に思っています。

ありがとうございます。

矢野委員長： どうもありがとうございました。
片野委員、どうぞ。

片野委員： 青年農業士の片野恵介といいます。よろしくお願いします。

先に、加藤委員からありましたインドの留学生が日本の農業に熱い視線を送っている。本当にありがたいこととございます。なぜ日本の農業に対してそこまで熱い視線をもらっているのかなと思ったときに、やはり日本人というのはこの狭い国土の中、土地利用が世界的に見て図抜けていると私は自負しております。

それは一朝一夕になるものではなくて、江戸時代の米の石高の反収量をまとめたグラフを見ますと、先祖たちの涙ぐましい努力がグラフにして見えるわけですね。そういうことの支えを、我々日本人自身が実のところ認識していないでその恩恵を受けているというところがあります。それを実のところ、インドの学生たちに教えてもらっているのではなからうかと。ぜひともインドの学生たちには、我々日本人に農業のこの涙ぐましい努力を逆に伝えてもらいたいというふうに私思っております。私自身も学ばせていただきたいと思っております。

ちょっと話が脱線してしまいましたですが、今回、社会、事業所、ま

た高校生との認識の隔たりとか、そういうのもあるんですけど、自分自身も反省せねばならないことなんですけれども、社会自体がもう本当に自分のことばかりで、即戦力も欲しい、すぐに成果を上げてくれ、そんな人材をよこせというふうなことで、経団連さえも昨今、教育カリキュラムが社会のニーズにおいて追い付いていないことへの懸念を表明しているわけですよ。それこそ未来の社会を支える人材を育成している気概を持っているのかと教育機関を喝破するわけですね。そのことの紙面だけを見ると、何か心のない人たちだななんて僕自身は思ってしまいますけれども、本当に池上先生が取りまとめてくれた10ページにある急激な社会の変化、これに関して僕自身思うと、この中のこれが、社会が生き急いでいるような、そういうふうに自分は思えてならないわけなんですけれども、この急激な社会の変化の事象に対しての余事象に少し僕は目を向けてあげたいなというふうに思っております。

その余事象というのは何なんだろうかというふうなことを思ったときに、今本当に今成果主義だとかそういうものにとらわれがちで、目に見えて成果が見える施策に目が奪われがち。社会がそれを応援しているわけですよ。

そういう中で、本当に時間をかけて腰を据えて物事に取り組む研究に対しての理解を同時に学生また社会に対して伝えていかなければならないというふうに思っているわけですよ。特に、私は全然門外漢なんですけれども、人文科学科なんていうものが実は衰退しているんじゃないかと勝手に思っているんですけれども、本当に梅の木のように早くは育たぬ研究をしているわけですよ。それこそ人間とは何なのかというか、自分自身を見詰める力というんですかね、そういう壮大なスケールの下、日々を研究にいそしんでいる若手の研究者、そういう方たちが花形であるITの研究などの人たちに現場を奪われてしまって、もう不要になってしまうんじゃないかと。そうなのはいけないと。人文科学科の若い研究者たちは、今本当に梅の木のようにすぐには結果は出せない。それなんですけれども、いずれはカシの木のように大木になる。そういう実力を持った、そういう可能性を持った人たちがいるわけですよ。そういうところにも人材が流れるように、そういうことをするようにしっかりと、今はIT、そういうものを使ってやることに関しての研究とか、そういうのもいいよと言うんですけれども、古典、昔からある研究、そういうものに対しての人間としても重要性というものを再認識するような授業を高校、中学でもやっていただいた方が、今この生き急いだ世の中です、いいんじゃないかと私は思っております。門外漢の話をしてしまいましたけど、以上になります。

ありがとうございました。

矢野委員長：　　すごく大事な点を今御指摘されたと思うんですね。ぜひ小委員会でもこの問題を論議していただきたいと思います。

森谷さん、お願いします。

森 谷 委 員： 絵描きの森谷です。よろしくお願いいたします。

今日いろいろお話を伺いながら、私からお伝えしたいことが3つございまして、1つ目は自ら考え行動するということに関して、学内の取組をちょっともう一度再検討してもらいたいこと、2つ目はグローバル人材ということで、私、静岡ユネスコの理事をさせていただいているのでSDGsに関して、3つ目は前回お話ししました心を整えることについて補足です。

自ら考えて動くなんですけれども、今総合学習のことをとても充実した感じで話し合いが進んでいてすばらしいなと思っていて、私も精いっぱい応援していきたいと思って動いております。

その一方で1つ問いかけなんですけれども、今までの学校教育の中でそれが足りないから多分動いていると思うんですけれども、今までの学校教育の中で自ら考えて行動できる子供は育つ環境じゃなかったのかというと、私はそうじゃなかったと思うんです。

1つ例なんですけれども、都立の江東区にある高校なんですけれども、とても自主性を重んじた指導をしていて、進学校でありながら部活加入率が90%以上、そのうち運動部が80%以上で、それこそすごく部活を頑張っているんです。サッカーも頑張っていて。その学校は基本的にあまり宿題を出さず、本人の自主性を重んじる指導をし、夏秋の大会が終わって今ぐらいから一気に生徒たちは受験勉強に入るんですけど、それもチームの力でみんなで協力し合って一気にゴーという感じで進んでいくんですね。3番手ぐらいの学力なので東大とか医学部とかは少ないかもしれないんですけれども、GMARCHレベルに多く入る学校です。そうしますと、大学の方から、おたくの高校の子たちがとにかく欲しいという声、とにかくおたくの高校が欲しい。どうしてと聞きますと、企業がこの子がいいというのがみんなおたくの高校なんだよということなんです。そう考えてみますと、本当に昔ながらのやり方で精いっぱい夏まで部活を頑張っていて、自分たちの考えで勉強も進めていて、いざ受験となったら自分たちでまたやっていくと。

前も話しましたが、一頃前の高校は受験指導というのは学校がそこまで関与しなかったと思うんです、自分たちの自主性に任せていて。進学というのは個々にとって一大イベントですし、家族の中でも大イベントで、この一大イベントを自分の力でちゃんと乗り越えるということまで導いてくれば、受験を通して自ら考え行動する力というのは十分付いたはずじゃないかなと思うんです。

あともう一つ、校内の取組ですごく気になっているのが学校行事がすごく縮小されていることなんです。これはもう小学校からずっとそうです。私も父兄としてずっと声を上げてきた立場なんですけれども、現在でも公立高校はすばらしい取組がたくさんありまして、ぜひ宮城監督に

も見に来てほしいんですけど、浜松北高校の文化祭、合唱祭、そして運動会、壮観です。もう本当にすばらしいし、静岡市内でも静岡高校の仮装は本当にすばらしいですし、親の代から続いている。私の親も80過ぎています、伝統のある仮装大会で本当にすばらしいんですけども、やはりどこの進学校でも必ず行事の後には大きい模試があって、何かみんなあんまり情熱かけてやってしまうと模試があるなという、その重しはずしと、模試の重しといいますか、何かすごくそういう流れは確実にあります。学校の方も、どう縮小していこうかみたいなせめぎ合いですけれども、何かそういった既に昔からやってきたことをもう一回見直してもらって、学校が進学学力にあまりにも傾倒してしまったように私は感じていて、昔ながらのことをしっかりやっていけば自ら考え行動することは十分できると思っています。それに加えて、総合学習が充実してくれば、更なる静岡県の教育になっていくと思っております。

次、グローバル化についてなんですが、今年の夏頃、北大に進学した生徒の話聞く機会がありました。大変優秀な生徒で、語学も堪能なお子さんで、北大に入って、グローバル人材を育成する講座がありまして、新渡戸カレッジというものがございます。それを受講したところ、大変な遅れを感じてすごく気後れしたということを知りました。他県から来た人たち、学力もすごいんですけどもプレゼン能力もすごい。それから、私はSDGsについて知らなかったと言って、これをすごく言っておりました。SDGsは聞いたことがあったんだけど、これが何か、そんなことも私は知らなくて、すごく遅れていたなと思うということで、他県の子たちは一体どうやって勉強もプレゼンも、そして海外のこと、自分自身の考えまでまとめ上げて大学生になっていく、どういう時間の使い方をしているかというお話だったんです。

その時間の使い方に関しては、ICTなど使いながら無駄なくやっていくべきとは思いますが、SDGsについて、ユネスコの理事としてもちょっと聞き捨てならず、もうちょっと宣伝していかなきゃなと思っていますところなんです。

静岡市内ですと、駿河総合高校が全生徒対象でSDGsを軸に総合学習に取り組んでくださっています。駿河総合はユネスコネットワークのユネスコスクールであることもあって、開学したときからずっとユネスコの理念に沿って総合学習を進めてくださっています。大変すばらしい発表会ですので、また年度末、見ていただけたらと思います。

あとSDGsに関しては静岡高校が今年度から、やはり全学生対象で取り組み始めてくださっているということ、すごくありがたく思っております。

このSDGsの必要性について少しだけお話ししますと、ただ海外の今のお困り事を知るというだけではなくて、この正式名称をまず知っていただきたいんです。一人も取り残さずということももちろん大切なんですけども、我々の世界を変革するという言葉なんです。これによっ

て採択されたものであります。

この変革するという大変強い文言で採択されているんです。では一体何を変革しなければいけないかということなんですけど、持続可能など、もう耳にたこができるほど皆さんお聞きになっていると思うんですが、この持続可能というのは、裏返しますと持続不可能な未来がもうあるんだよということなんです。このことはなかなか皆様、御理解いただく機会がなくて、実は1970年代からもう既に持続不可能な未来が待っているということは懸念されておりまして、それを子供たちに知ってほしいということで持続可能な開発に取り組む教育、E S Dと言いますが、これを最初に提唱したのが実は日本なんです。持続可能な、この先危うい地球についてどう考えるべきか、これを日本から提唱したこともあって、ユネスコE S D10年というのがありまして、これは日本ユネスコが牽引してまいりました。

この10年が終わった翌年、2015年にS D G s が正式に全世界に向けて発表されているんですけれども、このS D G s に関して言いますが、誰が取り組むではなく、全人類70億に取り組んでほしいことなんです。もう持続不可能になりつつある状況、危機感を持って変革できる子供を育てるのがユネスコ的に見ると一番今必要なグローバル的に活躍できる子なんです。

この変革できる力は、やはり先ほど言った学内でも養ってほしいし、総合でも養ってほしいし、そういう現状なのね、うんうんと知識として勉強するだけじゃなくて、地域のお困り事を高校生ながらに取り組んで、結果が出なくてもとにかく取り組むところまで総合でやってもらいたいと思っているところです。

もう一つ、このS D G s のポイントは、変革と、あと利他という言葉になります。変革と利他です。なぜならば、17のアジェンダのほとんどの問題事は、利己的な考え方の蓄積でこんなになっているんですね。人間だけだとか、自国だけだとか、自分だけだというとんでもない利己的なものが社会の中で許された結果こうなっているので、自分の進路に関わらなくても、明日の自分の受験に関わらなくても積極的に関わってくれる、変革と利他をポイントにS D G s で子供たちに総合学習をやってもらえたらと思っています。

すみません、長くなってしまって申し訳ないんですが、最後もう一つだけよろしいですか。ごめんなさい。

あと心を整える、総合教育会議でも取り上げてもらってありがたいなと思っています。

今日、これ持ってきたんですけれども、私の虎の巻の長谷部誠の「心を整える」です。それで、この最初の3ページの中に彼の思いはもう十分に入っていて、子供たちを取り巻く環境はどんどん変化して、心を落ち着けることすらできない。だからこそ、自分は一日30分一人で心落ち着ける時間をあえて取っている。そうすることで自分の心を落ち着け

て、自分の中から何かを引き出していけるという。静岡にはこういう人も出ておりますし、あとテレビでおなじみの齋藤孝先生も出ていますし、既に西部地域では黙想の文化もありますので、ぜひ実現するところまで導いていただけたらと思います。

長くなってすみませんでした。

矢野委員長： ありがとうございます。

皆さん、お話は尽きないと思うんですが、実はもう一つ議題がありまして、この小委員会のすばらしい御報告についての意見交換はこれで一段落なんですけど、私から1つ、池上先生にお尋ねしたいことがあるんです。

この報告を見ますと、モデル校による取組という言葉もありますが、言わばケーススタディのようなものですね。大きな方向付けはもうかなり進んできたと思いますが、そういう具体的なケーススタディのようなものについて取り組むかどうか、その点について御質問したいと思います。

池上副委員長： 池上です。

モデル校での取組というのは、議論の中で個別具体的な高校名が上がっていたわけではありません。ただ、総論として言ってもなかなか始まらないから、まずモデル校のような形でどこかで枠組みを作ってみることによって、それを言わば足場にして展開していくことができるのではないかという議論がありました。

一方で、モデル校の取組を枠組み化していくと、どこもかしこもそれと同じことをやって、実情は違うのに同じような枠組みでやろうとしてうまくいかないこともあるから注意が必要だという議論も一方でありました。

矢野委員長： ありがとうございます。

限られた時間の中で小委員会の論議を進めていただいているんですが、来年3月で1年になりますけど、もう一歩、二歩、この議論を進めて、実際に実務にいる人たちが、ああすばらしい、これもいいアイデアだなと思えるような、いろんな具体的な方向性というものがありますと大変有益だろうと思うんですね。一律にこれで全部カバーできるということはないと思います。

そういう意味でも、この小委員会、1年、3月で終わるわけですが、さらに来年度も続けてやっていただけて、これだけすばらしい内容の熱心な方々の御意見をもっと実践委員会としても伺って、それを実際、委員会の意見として総合教育会議に反映していくという形をつくりたいとは思っております。いかがでしょうか、皆さん。

ありがとうございます。

池上副委員長： 今のお話は、3月の後もさらにもう1年。

矢野委員長： 今言い忘れたことがあるんで言いますと、お忙しい方で誠に申し訳ありませんということを行いました。

池上副委員長： フルマラソンだと聞いて走ったら、実は100キロレースでしたと聞いたような感じですけど、もちろん事務局等がどうお考えかというの必要なんですが、実際やってみて、小委員会、先ほども申し上げたように本当に生産的な議論が展開しています。

もし、あと1年あるとすると、そこで出てきた議論をより具体的に静岡県の教育の文脈の中に埋め込んでいくというところまで少し働きかけることができるのかなという気も一方でしております。というのは、これで3月で終わると、私たちは言いたいことは言った、後は任せたと言って終わってしまうんですね。そこを少し具体化していく。もちろん私たちの責任がありますので、自分で自分の首を絞めることを今この場で、公の場で言っているんですけども、次なるステップへもし歩みを進めるということであれば、小委員会のメンバーは気持ちを新たにしてお臨んでくれるのではないかと推測いたします。

矢野委員長： ぜひよろしくお願ひしたいと思ひます。皆さん、深くうなずいておられますので、頼りにしてありますからよろしくお願ひしたいと思ひます。

本当に皆さんの議論を聞いていますと、思わず耳を傾けると時間の方は勝手に過ぎていくんですね。本当に困ったもんです。

小委員会については今回これで、また最終報告を伺って議論を積み重ねていくことができると思ひますので、また次の機会に議論をしたいと思ひます。

実は、「未来を切り拓く多様な人材を育む教育」というんですけど、定められた時間は20分しかないんですけどね。ちょっとだけ時間を延長させていただくかもしれませんが、御都合のつく方は少しお残りいただければありがたいと思ひます。

それでは、事務局から説明をお願いします。

事務局： それでは、事務局から御説明いたします。

資料は27ページ、資料6になります。

本日の論点は2つに分けてございます。1つは「才能を発揮する人材の育成」、もう一つは「グローバル人材の育成」としてあります。それぞれ具体的にどのような取組が考えられるか、検討の視点もございましてけれども、そちらも御参考にいただきながら御意見をいただければというふうに思ひます。

それから、めくっていただきまして28ページ、資料7でございますが、こちらは論点に関する県の取組を、ポイントをまとめたものになっております。詳細な説明は割愛いたしますけれども、1つだけ少し御紹介したいものがございます。

別冊で、お手元に「新時代の「課外活動」への挑戦」という掛川未来想像部Paletteに関する資料をお配りしております。中身は後ほど御覧いただければと思いますけれども、この取組は地域団体が主催します全国初の文化系地域部活動でございます。準備段階の平成29年度から県の文化プログラムとして採択、支援しているものでございます。今年で3年目となりまして、活動は着実に定着してきております。部活動の先進的な形として御紹介を申し上げます。

簡単ですが、事務局からの説明は以上でございます。

矢野委員長： それでは、これからそのテーマに移りますが、論点が2つあるんですが、一緒に論議を、意見交換を進めたいと思います。

どの点からお話いただいても結構ですから、御発言のある方、手を挙げてください。

星野さん、どうぞ。

星野委員： お願いします。

色々各論があると思うんですけれども、私の方から、そもそも今教育が、静岡は非常にものすごいチャンスがあると思っています。今まで、人口流出ではなくてどんどん移住する人を増やす、そういうポジティブな方の戦略が必要だということを方々で私も言っておりました。今まで移住のときの条件が、子育てと教育環境と、あと雇用というのがあったと思うんですが、今もはやワーケーションで、むしろいろんな首都圏の優秀な人材がじゃあどこでワーケーションしようかということで、雇用の部分がほぼ条件としてないわけですね。

つまり、そこで子育てと教育というので非常にいいところを探そうということで、今もうトライアルで全国いろんな地区に移住をするための準備をしている人がたくさんいると。優秀な人間が、どうしよう、どうしようと考えているということですね。そういった環境がまず前提にあるということです。

才能を発揮する人材とグローバル人材というんですが、これは恐らく静岡県内の人たちだけで考えてもなかなか難しいのではないかと思います、テーマ自体がですね。これは全然苦言でも何でもなくて、国内のいいところの調査をして、この静岡にどう落とし込もうかということの発想がどうしても重いと思うんですね、私は、いろんな教育行政の方の、これは静岡県に限らずです。でも、そのマインドセットでは、いつまでたってもそういったとがった人材とか本当の意味でのグローバルということではできないと思います。日本の中で2番手、3番手を目指していて

は絶対駄目だと思いますので、そういった中であくまで一例です。

一例ですが、例えば今、ミネルバ大学というキャンパスがない大学ですね、サンフランシスコが本拠地なんですけれども、そこは今すごく人気があって、世界中の優秀な人材がそのこの大学に入学します。昨今では、ハーバードを蹴ってミネルバ大を選ぶと。彼らは何をやるかというところ、世界にある7つの拠点に寮があります。サンフランシスコ、ソウル、インド、ベルリン、ブエノスアイレス、ロンドン、タイですね。アジアがたくさん入っているんですね。

ところが、そのこのミネルバ大のある関係者の話を聞いたら、日本でエントリーしているところはどこもなかったと。これから寮もどんどん入れ替えていこうと思っているんだと。そこで何をやるかというところ、7つの拠点で2年ずつ、2つ選んでそのこの寮で生活して、オンラインで全て授業を受けるんですね、世界中の。そのこのエリアで何をやるかというところ、そのエリアの社会構造とか社会課題の解決を学生が主体的にやるということです。例えば、これが静岡にもしその寮が来たら、私たちが今抱えているいろんな課題が一気に、ひょっとしたら解決するかもしれない。

先ほど申し上げたたくさんの失敗事例とか、いろんな魅力的な人とか国際的なこれから活躍する人たちがほっておいても空から降ってくるような状況になるわけですね。そういった発想もすごく必要なんじゃないかなと感じました。

先ほど話もあった、戻ってしまうんですけれども、とにかくクリエイティビティを発揮する機会が特に世界中少なくて、今、日本は特に少ないと。

今度、イギリスの「ザ・ナイン」と呼ばれるパブリックスクールのハロー校が日本にも進出すると。いろいろ聞くと、結構中国の留学生がメインだったりするんですが、岩手の八幡平の安比高原に日本校を開校するんですね。そういったところも含めて、ただインターナショナルスクールをというよりは、ちょっと駄目かもしれない、無理かもしれないと。だけど、ここを静岡の子供たちのために誘致するんだというチャレンジのマインドセットを私は静岡の教育行政に関わる人は変えるべきだと思います。いつまでも日本国内の2番手、3番手を目指しては駄目で、結構駄目元でいくと引かかかったりすると思います。

イトン校、ハロー校、去年、ラグビー外交でハロー校に関しては知事にも表敬訪問の機会をいただいたんですけれども、行きました。あと、アジアのいろんなエリート学校も思った以上に交流してくれます。彼らにとっては東京も静岡も関係なくて、単純にラグビーをやっているんだと。寮がある学校だということで行けるんですね。

聞いたら、アジアのエリート校のネットワークは、日本はちょっと敷居が高いから自分たちからアプローチしないで、インドとか、そういうところのインド工科大学が一番進学する学校とか、そういう交流のコミ

ユニティに入れたんですね。それはなぜかという、日本からアプローチがなかったからだということでした。ここですね。

先ほど、大人ももっと失敗すべきだというんでしたら、静岡の教育行政に関わる人は、駄目元も含めて、本当に静岡を変えるんだと。ミネルバ大に突撃したらあっさり断られる、それでいいと思うんですよ。そういう動きをどんどん発信してほしい。とにかく私はマインドセットを変えないと、幾らここで静岡に関わる人たちが話し合いをしてもどんどん縮小していくような政策しか出てこないと思いますのでというところを最初に。すみません、ちょっと私の私見も強くて、思いも強くて失礼なこともあったかもしれませんが、私の意見とさせていただきたいと思います。

以上です。

矢野委員長： 我々大人がまず失敗を恐れないという模範を示す必要があるということですね。大変厳しい、しかしちょっと希望を感じさせていただいた御発言だったと思います。

他にいかがでしょうか。

山本委員： その件で、1ついいですか。

トヨタさんが裾野に未来都市を建設するので、全県下平等にやろうと思ったらお金はかかるし大変な時間がかかると思うんで、そういうところに一緒に乗っかるというのも一つのアイデアかなと思いました。

以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。

どうぞ、加藤さん。

加藤委員： グローバル人材の件ですけれども、資料の34ページを見ると県の2020年の当初予算に比べて、2020年年間予定というのがゼロがいっぱいあるのは、これは静岡から海外にコロナがあるから出せない、ということでもゼロなんだろうなと思っているんです。

私、AFSの高校生の留学の理事長もしていますので、やはり私理事長としていつも思うのは、日本からなかなか今の現状で感染が桁違いに行っている欧米諸国であったり、いろんなところに送れないんですね。向こうへ行って医療がどうなるか分からないというところがあって、躊躇せざるを得ない。それは私もすごくよく、自分で体験しているから分かっているんですけれども、逆に受入れの方は、今私自分でやっているから分かるんですが、向こうの国でPCRを直前にやって陰性の子が来て、それでまた成田でPCRをやって陰性の子が今度はAFSが責任を持って2週間待機、隔離ではないので、陰性の子なので待機というんです、成田のホテルで職員が寝泊まりして、それからそれぞれの地域に

出していくと。

今回、第1陣で178人、日本へアジア20か国の子たちが来ましたが、こういう形できちんと安全性を確保した上でやっていますので、受け入れる方はできるんですよ。日本は何だかんだいっても亡くなられる方の数や何かも桁違いに少ないですから。

そういう意味で、今すごいチャンスだと私は思うので、来年も、ちょっと宣伝みたいになってしまいますけれども、20か国から250人受け入れることになっていますので、まだまだちょっと静岡の場合は受入れがすごく少ないんです。ですから、特にさっきの農業高校の話じゃないですけど、ぜひ農業高校とか、そういうところにインドの子とかバングラの子とかいっぱい来ますので、すごく優秀です。1人に対して2,000人ぐらい応募があったりする国もありますので、とにかく日本で学びたい、日本の高校生が何を考えているのか知りたい、農業をやりたいとか、アニメやりたいとか、みんなすごい夢を持っている子たちなんで、これはここにあるような予算ゼロでできることで、ゼロという有利なカードを受け入れていただいて、確かに授業料は免除していただくので、それは予算になるのかもしれないんですけども。あと1つ皆さんにお願いしたいといけなは、ホストファミリーを探していただかないといけなと。10か月間ですね。それはあるんですけども、それは2家族でもいいし、半年ずつでも構わないと。

そういうことで、やっぱり今の時代、オンラインではさっきできないことがいっぱいあるということがありましたけど、本当にそれで、生身の付き合いってすごい大事だと思いますので、ぜひこの機会に、外に人を出せないんであったら高校時代ぐらいから受け入れていただきたいなということをお願いしたいなと思いました。

矢野委員長：事務局の方から、このゼロの説明をちょっとしていただけますか。

事務局：教育政策課長でございます。

今、加藤委員がおっしゃられたとおり、こちらの方は海外に派遣する事業でございますので、現在コロナの関係で各種予約の方が難しいということで、もともと当初予算額は組んであったんですが、事業は執行できないという状況になっております。

矢野委員長：御想像のとおりでした。

他にいかがですか。

どうぞ、最初はクリスティーヌさん、それから白井さん、次にお願いします。

クリスティーヌ委員：遅くなって入って、申し訳ございませんでした。よろしいですか。

今の話の中でちょっと何かよく分からないところがあったのは、この

グローバル人材を育てるというのは、海外から来ていただいて育ってもらえるものなのか、それとも静岡県の中で静岡県民の方々に頑張ってもらってグローバル人材を育てていくのかということところがちょっと明確でない感じがするんですね。

今でさえ静岡県の中で静岡大学、上智大学、あともう一つお茶の水だったと思うんですけれども、そこで今イスラミック・スタディーズのコースをやっているわけなんですね。これから特にアジアの中ではイスラム教徒の人口が一番増えることに、今でも増えていますし、イスラム教徒の方が非常に多いわけなんです。イスラム教徒の中には、もちろんタリバンとかいろいろ、教徒とっていいか分からないんですけど、非常に過激な方々はたくさんいるものの、もっともっと普通にきちっとしたイスラムの方々が多くいらして、東京の中でも、非常にイスラム教徒でマレーシアから来られる方々とかインドネシアから来られる方々が、そういう点では日本の生活に非常に精通されていて、そして親しんでいる方がすごく多いわけなんですね。

そういう方々も、やはり静岡県のようなすばらしいクオリティ・オブ・ライフが高い地域で自分の子供たちを育てたい、大学に行かせたいということの中で、今、静岡県立大学の中にインターナショナルリレーション学科、ありますよね。そういうところをもうちょっとエクスパンドした形で、そういうところを受入体制として。海外から来ていただける方に勉強しに来ていただくには、やはりアジアからすばらしい先生方、たくさんいるわけなんですよ。それこそタイにも人権やいろんな技術を教えている先生方もいらっしゃるし、あまりにも欧米ばかりに目を向けたりしていると、身近なアジアからのいい人材を、日本だったら来たい。そして近いし、週末とかお休みのときに自分の国に帰れるだけの距離の方々もいらっしゃるの、すばらしい先生方がたくさん呼ぶことができると思うので、世界中から何か遠いところからということではなく、むしろ静岡県にとっていい県民になっていただけるような方々にもっと入っていただけるような、そういう環境整備をすることによって本当の意味でのグローバル人材というものがもっと育っていくのではないかと思うので、グローバル人材を求めるときにどっちの方向に向きたいのかということをもうちょっと明確にすべきじゃないかなという感じがいたしました。

矢野委員長： ありがとうございました。
 白井さん、どうぞ。

白井委員： 静岡大学の白井です。
 今のグローバル人材のことで、加藤委員とクリスティーヌ委員に重ねてということになりますけれども、先ほど加藤委員が英語でやり取りができないのが大変残念だと。優秀な子がいてもやり取りができない、英

語が使えなくてとお話ししていただきましたが、それと併せて言うと、とにかく安いコストで、オンラインで生徒全員が毎週英語を使うというのが本当に大事なことだと思います。

今この予算の方では海外に行くということを念頭に、限られた人数の人が限られた日数だけ行くと。リアルな体験を積むのはとても大事なことなんでしょうけれども、でもこれだけオンラインが出てくると、例えば文科省の方の動きでは、大学についていうと今オンライン留学が実際に検討されています。日本に居ながらにして海外の大学の単位を取る、あるいはデュアルディグリーで学位を取っていくということがもう実際に検討されていて、静岡に居ながらにして海外の大学の学位を取るということも出てくるだろうと思います。

また、日本国内においても、例えば私の知合いの理系の大学教員が話していたんですが、全員日本人のゼミであってもゼミは全部英語でやるというふうに言っていました。論文を読むのも英語だし、学会発表も英語だし、別に日本人同士だから日本語で話さなければいけないわけではなく、もう高校生の頃からどの子もブローケンでいいから英語が話せる、自分の言いたいことが言える、読みたいものが読めるぐらいの英語力を身に付けるためには、今どこでも毎週30分だけ話せます、月に1万円とか5,000円とか、安いオンラインの英会話とかもありますので。

あと第2言語として英語を使う人口の方が多いですね。だから別に流暢な英語でなくても、互いに通じ合えるような英語をとにかく毎週使ってみるということがとても大事なので、できれば小学校から、小・中・高と例えば同じ歳ぐらいの生徒と毎週話す。日記でもいいから、昨日何食べたでもいいからというようなことで、今回示されているような優れた人材を生かすものと、もっとベースを上げていくような、どの子も英語に触れていくような、それが優秀な才能を伸ばすということにつながっていくんじゃないかなと思うので、ぜひその予算とか仕組みの面で具体的をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

矢野委員長： ありがとうございました。
 藤田さん、どうぞ。

藤田（尚）委員： このグローバル人材の育成のところ、検討の視点というところに国内外で活躍するために必要なというふうに書いてありますけれども、先ほど山本監督の話とかも伺っていて、国内外で活躍することがゴールではなくて、多分、これは別に言葉の揚げ足を取るわけじゃないんですけども、例えば世界で活躍するために子供たちを育てるんじゃないで、世界に貢献する人材を育てることの方が大事であって、その結果、たまたまフィールドが世界であったり、もしかしたら静岡にいても世界で貢献できるかもしれないしということを考えると、今はこの地域の小さな静岡だけで考えるんじゃないで、そこに例えば先ほど皆さんがおっしゃ

っている英会話でも、もう普通にしていくなとか、海外の方と触れ合うことも普通にしていくな。全てを一般的にすることで、世界でわざわざ貢献できるじゃなくて世界に貢献できる人材を育てていくなというふうな考え方にしないと、子供たちを世界にわざわざどんどん出していって、優秀な人材をとにかく外に行きなさい、外に行きなさいというふうになっていってしまうような気がして、何かそのちょっとした感覚の違いが、遠くに行くことが目的になってしまって、何が最終的な人生のゴールなのかということを見失ってしまうような気がしたので、ぜひともこの「世界で」活躍するんじゃなくて、「世界に」貢献するという表現にしていたらと、そこに大きな違いがあるんじゃないかなというふうに思いました。

矢野委員長：なるほど、ありがとうございました。
才能教育の方で、どなたか御意見ありませんか。
私、教育現場を見ていて思うんですけど、大きな平均的な集団があって、それをまとめて教育するためには教室で教えるということですけど、その今の教育に物足りないと思っている人たちもいるし、ついていけない人たちもいるんですね。それぞれの才能なんですね。平均的な才能だけを上げればいいのかというと、そうじゃないと思うので、その辺についての皆さんの御意見があればちょっとだけ伺いたいと思います。
里見さん、どうぞ。

里見委員：なかなか今の学校制度の中で難しいのかもしれませんが、とにかく何か優れたところ、良いところを褒めて伸ばしてやる。徹底的にそれを伸ばす、そういう環境づくりができたなら、その子は違う世界が見えてくるのかなという感じは常々しておりました。運動でも、芸術でも、文学でも何でもいいと思います。
以上です。

矢野委員長：どうぞ、佐々木さん。

佐々木委員：今、里見委員がおっしゃった話、あと森谷委員が先ほどおっしゃった話、今まであったいろんな校内でのイベントがいろんな才能をみんなに知らしめるいい機会であったということは間違いのないわけですね。だけど、中々そういうものもいろんな環境の中で縮小されてきた。これは企業にも言えることで、企業もほとんど我々と家族、我々と従業員の距離はどんどん遠くなっているという感じがします。これはやはり職域でやる活動が少なくなってきたということが原因していると思います。
会社でもそうなんですけれども、一人一人の才能は全然違って、その才能を伸ばしたいのですが、みんな忙しくて、管理職らはプレイングマネージャーになってしまっていますので、自分も仕事しながら自分

の部下を見ているという感じになります。そうすると、隣のグループで何をやっているか分からないような、そういう状況がいつも職場には出てくるんですね。昔、我々が育てられたときというのは、隣のグループのグループ長だったり、その隣のグループ長も同じように自分のことを見てくれていたり、横の人を見ていてくれたりしたと。

これは学校でも同じで、どれだけの先生が一人一人に対して目を向けているかというようなことが実はその人の才能をうまくくみ上げるための大事な仕組みなんじゃないかというふうに思うんですね。学校現場を見ると、学校の先生たちはものすごく忙し過ぎて、そういったことに手が回らないという現状がこの資料から読み取れる。この中にはいろんないいことがいっぱいあって、いろんなイベントが書かれているんですけど、全部点になって線になっていない、面になっていないと、そういう感じで皆さん苦悶されているんじゃないかという気がしてならないわけです。そうすると先生たち、あるいは校長先生以下のスタッフがみんな同じ思いを持って、一人一人の生徒たちに、一人でも多くの生徒たちに目を向けられるような状況をどう作るかということが非常に大事なことなんじゃないか。

例えば、僕はちょっと分かりませんが、職員室で先生同士は休みの間に生徒の話をしているんだろうとか、そういうことが非常に分からないというか、そういう教育現場なのかなというふうに思いますし、見てあげることが必要ですし、生徒の方も見てもらっているという実感がないといろんなことで自分を前に出そうとすることができないんじゃないかなという気はします。

すみません、以上です。

矢野委員長： ありがとうございました。
 どうぞ、クリスティーヌさん。

クリスティーヌ委員： さっきの語学の話なんですけれども、もちろんないよりはあった方がいいんですね。

それで、週に1回とか2回の語学では恐らく子供たちは英語をしゃべれるようになりません。ただやりましたということで、社会人になってまた日本語だけになってしまうので、やっぱり常に常に、英語だけじゃなくていいですよ、フランス語でもいいし。でも、学ぼうとする語学があるのならば、やはりそれは毎日最低1、2時間はやっていないと身に付きませんので、本当の意味でのグローバル人材を育てていくのならば授業を完全に英語で、英語ってあえて選ぶんですけど、英語でなさるということがすごく重要なことで、やっていますということで見える化のグローバル化は私はよくないと思いますし、非常に逆に子供たちの時間を無駄にして、それだったら日本語をきちっとしゃべられる、国語をもっとちゃんとしゃべらせた方が子供のためにはなると思うんですね。

なので、英語をもし本当になさるならば、きちっとたくさんやらせてあげていただきたいなと思います。

矢野委員長： 確かに、外国語の教育の仕方というのも大きな課題ですね。

私はちょっと相撲に関係しているんですけど、外国の力士が来て1年間過ごすともうぺらぺらですね。なぜかといったら、24時間部屋にいて、一人も通訳いないんですね。頭が痛い、おなかが痛い、おなかが減った、そういうことが日本語でしか言えないんですね。そういう環境で毎日毎日やっているとすぐできるようになる。

日本人は、何ていうのか、そういうことをしなくても生きていられるからあまり語学が上手にならないんじゃないかなと思って、自分で反省しています。本当に驚くべきことですね。

それでは、まだまだお話し足りないと思うんですけども、大分時間も過ぎましたので、最後に知事から御意見をお願いします。

川勝知事： まず池上先生、小委員会の取りまとめ、ありがとうございました。中間の取りまとめということでございますけれども、全ての委員の方々から貴重な意見が出ましたので、これを取り入れていただいて最終報告にさせていただければと。また来年度もよろしく願いいたします。

30になったら静岡県って御存じですか。30歳になったら静岡県に戻って来られるように、色々環境づくりをしているんですけどね。ところが、今までは終の住みかの静岡県だったんですよ。それが実はここ数年、80%以上が30前後なんですよ。だから、こちらに戻ってきている子が多くなってきているということですね。

30になったら静岡県というのは、実は30前後までは失敗してよろしいということなんです。つまり、都会に出た、あるいは外国に行った、どこかで仕事をしてきたと。ところがうまくいかなかったと。それを前提にして戻っていらっしゃいと。そういうことで、たとえ変人・奇人の多いと言われても構わんと。個人的には変人とか奇人の方が好きなタイプなものですから、自信を持ってやればいい。しかし失敗はすると。30前後になって何か責任を持ってやれるようになればよろしいと。ただし、失敗は常にありますから、それを可能にするような静岡にしていこうと。

今日お話を聞いていて、結局、学校の先生だけじゃなくて、ここにいらっしゃる方々、またその方たちが接した大人全てがコミットしなくちゃいけない、そういう時代になったなということをつくづく感じますね。

ですから、社会総がかりとか地域ぐるみというのは、もう言葉だけでなく、それをどのように教育の中に落とし込んでいくかというのが課題だと。それにはやはりいいものを見る、いい人に就く、いいことを経験するということが大事で、なかんずく教育の場合にはいい人に就く

と。いい師というところとあれですけど、いい先生に出会うと。いい方に、友達も含めてですけども、そういう人に出会うということが極めて大事で、その機会をなるべく多くして差し上げればよろしいかなというふうに思っております。

それから今、静岡県370万人のうち外国人は10万人強ですけども、毎年数千人の人たちが入ってきています。出ていく人も多いので、しかし外国人の入ってくる人が多いので大体370万で一定しているんですよ。これはまだ少ない、10万人じゃあ。私は1割でもいいと。したがって、370万ですと40万弱ぐらいが外国人であっていいと。

それはどういうことかという、一切差別しないということです。色が黒うが白うが、宗教が何であろうと、こちらで生活をし、ということは同時に勉強するということが大事ですので、そういう環境を整えて差し上げて、障害者の方が健常者に対して引け目を感じないように、外国の方もここにいることに対して差別されないような地域社会をつくっていかうと。

それは共通語は何になるのでしょうか。当然、静岡弁になります。ですから、全員が英語をしゃべるなんて不可能なことです。そんなことをする必要のない人たちもいらっしゃるわけですね。そのところはあまりインフェリオリティーコンプレックスと申しますか、劣等感を持たなくてよろしいと。むちゃくちゃできる人がいますから、その人が通訳でやってくれれば、日本の首相なんか全部そうでしょう。全部すごいベテランがいますから、その人がやってくれればそれでいいわけです。ですから、あまり英語をしゃべらなくちゃいけないというふうな強迫観念を持つ必要はないと。

静岡県では静岡弁が標準語だということで、そういうつもりで外国の方たちがいる。内なる国際化ですね。そうしたものを、ただし、素晴らしいインド人に会ったとか、中国人に会った、インドネシア人に会ったと。それで英語とか、中国語とかインドネシア語を勉強しようとなったら、これは本気になりますから、そういうような形でよろしいと。外国語を1つぐらいできた方がいいというのはもちろんあるわけですけども、言葉については、ここが世界を相手にしているということで、東京じゃないと、愛知じゃないと、ここです。ここは世界を相手にしているということですね。

そういう意味で学力が大事だと言ったのが高校生で、やる能力が、意思を持っていることが大事だというのが実業家で、ですから学力は3%でいいと言っている、実業家が。多くの才能の一つだということでもあります。

だから、あまり今までの偏差値教育というものにとらわれない、そういういいチャンスが出てきたと。ただし、これは出口がまだ見えません。ですから、相当試行錯誤があると思います。当然失敗もあると思う。これを前提にして色々やっていきたいと。それで、責任は最終的に

は私が持ちます。しかし、みんなで、無責任体質でいうみんなではありませんで、それぞれが責任を感じながら、また共有しながらやりさえすれば、それをみんなで許し合えるということでやっていきたいと。

ですから、この小委員会の提言、ここでの議論、そしてそれを取りまとめて総合教育会議へ持っていきまして、そこで実践に移していくと、こういうスタイルは変わりません。

最後、山本さんがオープンシティのことを言われました。そこで必要なのは、外国人の人が来ますから、だから教育と買物と医療なんですよ。医療と買物は全く問題ありません。そしてあとは教育ですね。スポーツは非常に分かりやすい。サッカーでも、ラグビーでも、バスケットでも、そういうのは分かりやすいし、そういうふうなことをもう既に走りながらやっております。ですから、ここは初めから、オープンシティは世界にトヨタさんが富士山の麓でつくるといって、来年の2月23日に建築が始まるんです。ですから、間違いなくここはグローバルな中心の一つになります。唯一の中心ではありません。多中心の一つの中心です。そういうものになるということを前提にして子供たちの教育を、ここにいる全ての子供たちの教育を考えていこうと、こういうわけで、30代までは徒弟時代といいますか修業時代で、あまりてんぐにならないような、そういう青年を育てていきたいと思っています。

今日は本当に素晴らしい御意見をいただきまして、これが次の総合教育会議、また来年度につながりますように念じております。

本当にありがとうございました。御礼申し上げます。

矢野委員長： 次の総合教育会議は1月にやられますが、そこで今日行われた議論を紹介して実現に結びつけたいと思います。

1月の総合教育会議には、今度は池上副委員長に出ていただいて、この会議の全体の模様について御報告をいただきたいと、こう思います。

それでは、進行を事務局にお返しします。

事務局： 長時間にわたり御協議いただきまして、ありがとうございました。

次回、実践委員会につきましては2月16日の開催を予定してございますので、また後日、事務局より御連絡を申し上げます。

以上をもちまして、第3回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を終了いたします。

本日はありがとうございました。